

プラトン『メノン』篇 78c のせりふの振り分け、句読法について 瀧 章次

プラトン『メノン』篇 78c において、現在のテキストは、1872 年の Sehrwald の提案と一致する仕方で、せりふを振り分けるが、それに対して、それ以前のテキストは、9 世紀以降の中世写本に従い、異なった仕方で、せりふを振り分ける¹。

この二つのテキストの違いとは、二つのソクラテスのせりふ、「よいものと君が言う(καλεις)のは、健康と富との両方のようなものではないのか」と「よいものと君が言う(λεγεις)のは、そのようなものの外にほかにないということかね」との間に来る文言、

καὶ χρυσίον λέγω καὶ ἀργύριον κτᾶσθαι καὶ τιμὰς καὶ ἀρχάς

について、これをもまた、ソクラテスのせりふとして全体をひとつの長いせりふとするか、それとも、これをメノンのせりふとするか、いずれかの違いである。9 世紀から中世を通して 19 世紀に至るまで、この文言はソクラテスのせりふに繰り込まれ、終りにしばしば疑問符がつけられていた²。しかし、Burnet、Croiset、Reich の報告によれば、Sehrwald によって初めて、この文言はメノンのせりふに振り分けられた。その後、テキスト編集者は、この振り分けに従い、そして、

¹ 12 世紀シチリアにおける Aristippus のラテン語訳も現存中世写本のせりふの振り分け方と一致する (Kordeuter, 1940)。Aristippus については、伊東、2006 年、200、237-241。

² 参照した校訂は、Stephanus、Stallbaum、Hermann、Hirschig、Bekker は校訂に用いた写本の異同の報告のみ参照 (I 233)。F. Ast の校訂は確認していないが、当該箇所における違いは他の校注において報告されていない。なお句読法については、以下の違いがある。写本 BF には、前の節 (clause) πλοῦτον の後にも、本節 ἀρχάς の後にも疑問符がない。写本 TW には、前節 πλοῦτον の後には疑問符がないが、本節 ἀρχάς の後には疑問符がある。Aristippus のラテン語訳では、前節 πλοῦτον の後に疑問符があるが、本節 ἀρχάς の後には疑問符がない。因みに次節 τοιαῦτα の後には、写本では、F を除いて疑問符がない。近代では、翻訳、注解も交え、Stephanus、Stallbaum、Hirschig、Grote (note o at pp. 5-6) は、前節 πλοῦτον の後にも、本節 ἀρχάς の後にも疑問符がある。Schleiermacher は、Aristippus に同じ。Ficinus、Sydenham、Cousin、Hermann は、前節 πλοῦτον で文を区切らず本節 ἀρχάς までを一つの文とし、疑問符を付す。Jowett の「意識」では、次節の終わり (原文では τοιαῦτα まで) を一文とし、最後に疑問符を付す。なおまた、プラトンの中世主要写本の符号は、厳密に言うと、現代の句読法の体系の中に位置づけられる疑問符とは異なる。何よりも、疑問詞で始まる文には、ほとんど付されていないからである。しかし、どのような意味論的特性のある個所に付されているかを調査すると、多くは、疑問詞は用いていないけれども、ほかの表現で話者が問う意図を持っていると判断できる個所に付されている。従って、厳密には、当時の句読法体系内の意図で言えば、通常は無標記に対して「非-無標記」とする印というべきものであろう。しかし、本論では、議論に支障がない限り、中世写本についても「疑問符」としておく。詳しくは、拙稿 2008、2009a 参照。

せりふの終りに終止符を付してきた³。

この Sehrwald を境とする、テキスト編集上の変更に関しては、特に議論はない。管見するところ、問題への論及は Robin のみである (Robin, 1950: 1319)。

それでは、もとの Sehrwald の議論はというと、プラトンのテキストに関する4つの読みの変更を提案する1ページ半の小論の一部で、1パラグラフからなる。先ず問題個所について、ἀγαθὰ から ἀρχαῖς までを一文とし文末に疑問符を付す、Hermann の句読法と同じテキストを示す。その上で、健康、富に続く事例はメノンに語らせ、拠って「(ペルシャの) 大王の父祖以来の賓客」という表現の効果を発揮させるべきであるから、せりふの振り分けを変えるべきであると論ずる。そして、劇作の中世写本に起きるせりふ振り分けの混乱と生成原因を説明し、本来の振り分けに戻す事を提案する。この議論において、Sehrwald は、動詞 λέγω が話者の主張を表すこと、「よいもの」の事例について、富と健康の2例に続いて、2対の事例、計4例が並列に並んでいること、「大王の父祖以来の賓客」は富を好むことを表す表現であること、以上を議論の前提として用いているが、その妥当性については論じていない。

それでは、Sehrwald 後、校訂者はこの議論並びにその前提に従ってきたのであろうか。そもそも Sehrwald の議論を参照した上で、本文の変更がなされたのか⁴。言及がなされていないから、実際の経緯は詳らかではない。しかしながら、言及さえなしに、Sehrwald 提案が採用された理由を想像すると、Sehrwald の前提を含め、次のようなことではないかと考えられる。(1) 中世写本のせりふの区切りはしばしば誤る。(2) 問いと答えの交代として、均整が取れている。(3) 78d の ὡς φησὶ Μένων との内容的な対応が明確になる。(4) 動詞 λέγω の用法、働きの説明が単純に済む。(5) メノンの人物描写が明瞭になる。

現在の全面的な支持は、もはや議論を要しないと思われるほどの、ある種このような単純明瞭な説明が暗黙裡に了解されているからであろうと考えられる。しかしながら、「単純明瞭」と映ることに、反省すれば、それを成り立たせている諸条件がある。その存立条件は、本当に確固たるものであろうか。上記(1)-(5)は推測によるものであるが、『メノン』篇の理解として、依然残る疑問点を、以下において示したい。

(1) 中世写本では、なるほど、Sehrwald も言うように、せりふの振り分けが混乱していることが少なからず起こる。例えば、プラトンのテキストの場合では、ソクラテスの問答の場面で、せりふの振り分

³ 参照した校訂は Schanz, Thompson, Burnet, Croiset, Bluck, Reich, Merkelbach. Sehrwald のせりふの振り分けに従う近代の翻訳は、Croiset, Lamb, Robin, Guthrie, Reich, 副島、藤澤、向坂、Grube, Sharples, Merkelbach, Day, Cazeaux, Kranz, Kévorkian, Beresford, Waterfield, Scott. Castellón は、テキストは Sehrwald に従うが、対訳は、中世写本に従う。なお「Sehrwald が初めて」か、この問題は、少なくとも、M. Schanz, *Commentationes Platonicae*, 1868, *Novae Commentationes Platonicae*, 1871 の確認を要する。本稿で参照した Schanz のテキストは、1881年のものである。

⁴ Sehrwald 支持者においては、Reich の広範な書誌にさえ、Sehrwald 論文の書誌情報が、明記されていないが、Engelmann にその記載がある。

けが一つずれると、問い手と答え手が逆転しておかしくなる。その結果、意味が通らず、写字生または修正者が、一人称単数現在の応答の動詞を含む文に疑問符を付すことも起きる。例えば、写本 BTWF において、Grg. 496e διψῶντά γε φημι λυπούμενον; とある。また、類例として、写本 B では、Grg. 494b-c で、καὶ διψῆν γε καὶ διψῶντα πίνειν λέγω と読む結果、せりふの区切り目が見失われ混乱している。しかし、その一方で、中世写本では、一人称単数現在形の信念・主張を表わす動詞によって、話者が断定を、弱めたり回避したりする結果、實際上、問いがなされていると考えられる個所において、その動詞を含む文の末尾に疑問符を付すことが散見される⁵。

(2) 問題の文言が置かれている文脈は、徳について、メノンが提出した定義を、ソクラテスが吟味する文脈にある。従って、定義の吟味を通じて、その先行条件をなすメノンの信念が、対話の場で明らかにされる。それ故に、当の文言で、メノンが己の信念を表出することは自然な問答の運びと映る。しかし、徳の定義の前半部分に関する問答をよく見ると、メノンは進んで自分の考えを言い表している訳ではない。ソクラテスは、メノンに、問いに対して、諾否以上に、具体的に答えを展開する余地を与えていない。先行場面でも、ソクラテスは、一ならざるさまざまな徳について(71e-72a, 73a, 74b)、メノンが華美荘厳な弁舌を揮うことを塞いでいる。問いから、答えの候補まで、仮想の問答を駆使して、お膳立てをしている。そして、メノンも主導権をとろうとしない(e.g. 75b)。このように、直近、先行場面の応酬から考えると、問題の文脈で、場の禁則事項を犯しても「よいもの」の多くをなお雄弁に語ることを(80b)、メノンが狙っていたと言えるか、もちろん、「徳=人のよさ」の定義にもものよさを導入する循環に依然気付いていないとはいえ(cf. 77b)⁶、疑問の余地がある。本箇所は、確かに、議論の闕に目敏いながら(75c)、「云々とか…」と誘発され自ら畏におちたとも解釈できるけれども、他方、ソクラテスが、「ほかにはなにもないか」と問うことによって、なおさらに事例を継ぎ足せはしても内容を展開する余地は与えない、そうした策を講じていると解釈することも有効である。

(3) ὥς φησι Μένων における動詞 φησί はメノンが主張したことの証拠だ(Robin: 1319)としても、自ら進んで意見表明することだけが、主張することではない。問いに対して諾否をもって応ずることによっても主張はなされ得る。本箇所では、μή で始まるソクラテスの問いに、メノンは、考えもなくただ οὐ と反応しているのではなく、実際、ἀλλά 以下「それですべて」と答えを展開している。そもそも、

⁵ 『メノン』篇では、71c ...ὥς ἐμοὶ δοκῶ F、71d δοκεῖ γὰρ δήπου σοι...W、72a ὡσαύτως δὲ οἶμαι... T、76d-e ...οἶμαι ἐννοεῖς...F、82a ...ἵνα δὲ ἢ εὐθὺς φαίνωμαι...TW などがある。全般的には、写本 A B T W F とも、疑問符は、主に次のような特徴のある文に付されている(前掲二拙稿参照)。(1) 文中の疑問詞、(2) ἄρα との区別としての ἄρα、(3) ἦ との区別としての ἦ(e.g. ἦ γάρ)、(4) 否定辞、(5) 二人称単数、一人称複数の動詞など聞き手の意図への言及、(6) 直前の疑問への応答に関説する小辞 οὐκοῦν、ἄρα、καί、δέ、ἀλλά、(7) 疑問に続く理由の γάρ、(8) 一人称単数の信念・主張を表わす動詞(e.g. 挿入句 οἶμαι)。

⁶ 古典期で、形容詞 ἀγαθός の名詞形はと尋ねられれば、ひとは ἀρετή と答えるほかないであろう。

問題の場面は、メノンが積極的に意見を開陳するのではなく、メノンの考えをソクラテス自ら語るところから始まっている (78c)⁷。さらに先行する場でも、ソクラテスの語るところは、自らメノンの気に入るようにと明かすように、多々、メノンが肯定しそうな考えとなっている (e.g. 76c-e)。また、発言動詞を伴う *ὡς* 節の用例として、他者の発言を直接引用するのではなく、話者の言葉によって他者の考えを間接に言い表す用例がプラトンにある⁸。

(4) 話者が、直接法一人称単数現在形の *λέγω* を用いれば、主張することになり、従って、本個所では、「金銀の獲得」、「名誉と地位の獲得」を善いものとする考えに、話者が関与することになるという解釈は、もっともであるが、必ずそうなるとは限らない。そう解釈するまでもない、無理のない *λέγω* の解釈がある。確かに、動詞 *λέγω* を、「...を数える」、「...を意味する」(「...で...を意味する」の略も含む) といずれの意味にとっても、文脈を顧慮せず独立の文と仮定すれば、話者が内含されている命題に関与していると受け取るのは、無理からぬことである。しかし、この文脈での動詞 *λέγω* は、疑問詞を伴わない思案の接続法ととらなくとも⁹、先ず対話相手の信念について問い、そしてその問いの内容について注釈するために用いられていると考えることができる。またそれによって、動詞 *λέγω* を含む文は全体の問いの一部となる (cf. *Chrm.* 168d; *Grg.* 509d; *Phd.* 65d, 73c, 94b; *Cra.* 434a; *Alc. I* 107e)。この場合、話者が、動詞 *λέγω* を用いて、内含されている命題に関与していると考えするには及ばない (cf. Hermann)。実際、ソクラテスは、動詞 *λέγω* を用いて、先立つ 72e、75e において、既にこのような問いの注釈を行っている。また、本箇所は、*λέγω* が中位に置かれているので、配置から考えても、前文の一部分を明確化する用法である可能性が高い¹⁰。さらに、関与の当否が問われる命題の面

⁷ 78c-d で、写本 F は、*ἴδωμεν* の欠損、*οὐκ, ἀλλὰ πάντα λέγω τὰ τοιαῦτα* の脱漏、*εἶεν* 後のせりふの区切りなど、読み通せるものではないが、*ὄν εἶ λέγοις* BTWF^{m8} に対して、*ὄν λέγοιμι* という読みを伝えている。不定詞句の表わす命題を *p* とし、作用子の働きを模式化すると、*γάρ (λέγω (ἴσως (φῆς (p))))* という支配構造において、可能性の希求法として挿入句 *λέγω* (注 10 参照) を用い、メノンの考えを婉曲的に述べる文となる可能性を示す。

⁸ *Ap.* 27d; *Hp. Ma.* 289a, c; *Cra.* 392e, 410c; *Th.* 189d。

⁹ *λέγω* の疑問詞付きの思案の接続法は、例えば、*Pl. Ap.* 20e; *Chrm.* 166d; *A. Ch.* 855。

¹⁰ *Grg.* 454b, 464c; *Men.* 77c; *Ion* 540b, c bis; *Cra.* 421c, 430e; *R.* 333c, 423a; *Th.* 181d; *Phlb.* 38b。なお、ここでの動詞 *λέγω* の意味は、「...を意味する」、「(...で) ...を意味する」(二重対格をとる構文の省略形)、「(...の中に) ...を数える」(e.g. *Phlb.* 27b; *Lg.* 649a) のうちいずれの意味で、話者によって用いられ、そして聴者によって理解されているか、この問題は、厳密には決定し難い。理由は以下の通り。(い) 動詞の意味それぞれも互いに意味上独立しておらず交差する部分をもつ。(ろ) 二つの対格を取る動詞、*λέγω* と *καλέω* との近接文脈域での代替現象もある (e.g. *Grg.* 468a; *Prt.* 333d-e)。(は) 前後で目的語となる前一对「健康・富」と、後二対「金・銀」、「名誉・公職」との間の、概念関係が、「富」と「金・銀」の対象が重なるように、包含関係、並列関係 (cf. *Grg.* 467e)、派生関係のいずれか、また、*τὰ τοιαῦτα* の指示対象は何か、これらの問題について、当事者がどう理解していたか決定し難い。

から考えてみても、よいものの内容として、「健康と富との兼備」、さらに「金銀の獲得」、「地位と名誉の獲得」を連想することは、当時のポリス市民として、ありきたりの発想であろう¹¹。ソクラテスが、メノンのお気に入りの考えとして想像することは突飛なことではない。実際、メノンは – もちろん、だからメノンが自ら口にしたのだと論ずる論拠ともなるけれども – 成年男子としてすぐれている事の要件として、「公務」(71e;「ポリスの経営」73a)、「人を支配すること」(73c)、「気前のよさ」(μεγαλοπρέπεια 74a; Arist. *EN* 1107b16-21; *Thphr. Chara.* 22) を挙げており、ここでソクラテスが語る内容を、既に示唆している。また、ὡς φησι Μένων の ὡς の働きは、メノンの主張にお付き合いし、依然「同意」していることとしても響く¹²。

(5) 確かに、「健康と富との両方のようなことではないのか」との問いに誘われ、一足飛びに¹³「金銀に地位と名誉の獲得も」と語る様も、すぐれたメノンの活写であろう。また、「大王の父祖以来の賓客」という表現も、金銀の獲得としての徳を考えるメノン像を惹きたてる効果をもとう。しかしながら、「徳の探求」のために、この若者を我儘な愛童に見立て、ソクラテスがお膳立てに励む様も、基調として続く(e.g. 86c-e)。「大王の父祖以来の賓客」という褒めそやしは、歓待に与る様を浮き彫りにする効果とも理解しうる¹⁴。

¹¹ Merkelbach の 78c, Thompson, Bluck の 87e に関する注、Dover, 1974: 226-236、そのほか *Men.* 87e; *Hp. Ma.* 283b, 291d-e; *Euthd.* 279a-b; Arist. *Rhet.* 1365a37-b11; πλουθυγεία *Ar. Eq.* 1091, *Vesp.* 677, *Av.* 731; scholion ad *Eq.* 1091 を参照。なおポリスにおける名誉と地位の獲得という事柄が、78d 以下対話の話題からすぐ消えてしまうが、その理由は、定義の前半の吟味同様、獲得の対象よりも、獲得そのものを、ソクラテスが問題としているからと説明できる (cf. Bluck *ad loc.*)。また、このように、問い手が新概念を導入し、答え手の承認によって、対話の方向を転換する手管は、*Ap.* 26c, *Hp. Mi.* 373e, *La.* 192e, *Hp. Ma.* 293e-294a などに見られる。

¹² 様態・方法の関係副詞ὡςについては、信念・主張を表す動詞を伴い、節を先行詞とする場合、現存古代ギリシア文学古典期の用例には、英語のasの並行する用法と同じく話者の同意を含意する用法ばかりでなく、話者が同意を控え、他者の主張のみを明示する用法も頻繁に見られる。その一方で、いずれの用法であるか、文脈上両義的な使用法が、プラトンにはしばしば見られる(拙稿、2009b)。本箇所では一部の訳者は注もなく「メノンによれば」とソクラテスの同意を回避するが(e.g. Guthrie, Gtthbe, Beresford)、見かけの「同意」は87e-89a, esp. 88a μεγαλοπρέπειαまで問題とならない(cf. *Ap.* 29d-e; *Lg.* 743a)。

¹³ 諾否を問う問いに、諾否の意志を示す明瞭な言葉をもって協力的に応ずることなく、諾(あるいは否)を前提として、応答を展開する、プラトンやそれ以外の古典期における用例は、*Pl. Euthd.* 298d; *Prt.* 349e; *Grg.* 474b; *Men.* 92b, 93a; *Hp. Mi.* 363c, 371e; *A. Eu.* 595-596; *Pr.* 53-54; 930-931; *S. Aj.* 49-50; *OT* 555-557; *Ant.* 748-749; *OC* 1431-1432; *E. Hel.* 105-106; *Ion* 1414-1415; *Ar. Nu.* 853-854。

¹⁴ Εἶεν... δὲ δὴ... (78d)のδὲを、75cに倣い仮言的提示(Stallbaum, Thompson)と取るとの提案は、文脈上二義的なὡς節を、話者の同意を含意する一方の意味で理解していることによると考えられる。ὡς節が二義的であれ、δὲ δὴは、対照の働きを示しており、定義前半との(Bluck)、あるいは、伏在する価値観との対照(Sharples)を示すと考えられる。しかしながら、ὡς節のφησίは直接引用を示すとは限らないので、δὲ δὴの解釈が、動詞λέγωを含む文言の振り分けを決定することにはならない。

以上(1)–(5)の問題点を考えると、Sehrwaldの提案に従って、『メノン』篇のこの場面を、徳の内容として、金銀の獲得を付加したメノンに、ソクラテスが驚き呆れる、あるいはそう見せるという構図に収めることは、ソクラテスを問答上の詐術的な振舞いの嫌疑から放免することにはなろう。しかし、「ずるさ」が見えないソクラテス、それが『メノン』篇に描かれる対話に嵌るか疑問である。

参照文献

- 『メノン』篇のテキスト、注釈、翻訳：
 Bekker, I. *In Platonem a se editum commentaria critica*. 2 t. Berlin, 1823.
 Beresford, A. *Plato Protagoras and Meno*. London, 2005.
 Bluck, R.S. *Plato's Meno*. Cambridge, 1961.
 Burnet, J. *Platonis Opera*. t. III, Oxford, 1903.
 Castellón, E.L. *Platón, Menón*. Madrid, 1999.
 Cazeaux, J. *Platon. Ménon*. Paris, 1999.
 Cousin, V. & Karsenti, T. *Ménon ou de la vertu par Platon*. Paris, 1999 (orig. Cousin, V. *Œuvres de Platon*. Paris, 1822-1839).
 Croiset, A. *Gorgias, Ménon*. (Platon Oeuvres Complètes, III-2) Paris, 1923.
 Day, J.M. *Plato's Meno in focus*. London, 1994.
 Grote, G. *Plato and the Other Companions of Sokrates*. Vol. II. London, 1865.
 Grube, G.M.A. *Plato, Meno*. Indianapolis, Ind., 1976.
 Guthrie, W.K.C. *Plato Protagoras and Meno*. Harmondsworth, 1956.
 Hermann, C.F. *Platonis Dialogi*. III. Leipzig, [1851].
 Hirschig, R.B. *Platonis Opera* I. Paris, 1856.
 Jowett, B. *The Dialogues of Plato*. 3rd ed. 5 vols. Oxford, 1892.
 Kévorkian, J. *Ménon Platon*. Paris, 1999.
 Kordeuter, V. *Meno*, interprete Henrico Aristippo. Warburg, 1940.
 Kranz, M. *Platon Menon*. Stuttgart, 1999.
 Lamb, W.R.M. *Plato Laches, Protagoras, Meno, Euthydemus*. Cambridge, Mass. 1924.
 Merkelbach, R. *Platons Meno*. Frankfurt, 1988.
 Reich, K. *Platon, Menon*. Hamburg, 1972.
 Robin, L. *Platon Œuvres complètes* I, Paris, 1950.
 Schanz, M. *Platonis Gorgias, Meno*. Lipsiae, 1881.
 Schleiermacher, F. *Platons Werke*. II-1. 3rd ed. Berlin, 1856.
 Scott, D. *Plato's Meno*. Cambridge, 2006.
 Sharples, R.W. *Plato: Meno*. Warminster, 1985.
 Stallbaum, G. *Platonis Meno et Euthyphro Gothae et Erfordiae*, 1836.
 Stephanus, H. (ed.) & Ficinus, M. (tr.) *Platonis philosophi quae extant graece Vol. 4. Biponti*, 1778.

Sydenham, F. *The Meno in Five Dialogues of Plato bearing on Poetic Inspiration*, ed. by A.D. Lindsay, London, 1910 (Sydenham's translation: 1773).

Thompson, E.S. *The Meno of Plato*. London, 1901.

Waterfield, R. *Plato Meno and Other Dialogues*. Oxford, 2005.

向坂寛訳『メノン』(『プラトン著作集』4所収) 勁草書房, 1979.

副島民雄訳『メノン』(『プラトン全集』5所収) 角川書店, 1974.

藤澤令夫訳『メノン』(『プラトン全集』9所収) 岩波書店, 1974.

そのほか：

Dover, K. *Greek Popular Morality in the Time of Plato & Aristotle*. Indianapolis, Ind., 1994².

Engelmann, W. *Bibliotheca scriptorium classicorum*, 8th ed. by E. Preuss, 2vols. Leipzig, 1880-1882.

Sehrwald, C.F. "Zu Platons Dialogen" *Jahrbücher für Classische Philologie* oder *Neue Jahrbücher für Philologie und Pädagogik*, 105 (1872): 463-464.

伊東俊太郎『十二世紀ルネサンス』講談社、2006 (原本：岩波書店、1993)

瀧章次「プラトン著作中世ビザンツ写本 Parisinus graecus 1807 fol. 1^r col. 1 – fol. 14^r col. 1 (『クレイトポン』、『国家』第1巻) に付されたる疑問符の形態、出所、特質について」『城西国際大学紀要』16-2 (人文学部) (2008) pp. 73-104.

id. (a) "A Survey of the "interrogation marks" in Plato's Socratic Dialogues (the *Gorgias*, *Meno*, *Hippias Major*, *Hippias Minor*, *Ion*, *Republic* I) in Vindobonensis suppl. gr. 39 (Codex F) in Comparison with Those in His Other Major Manuscripts" 城西国際大学物質文化研究センター、『物質文化研究』6 (2009) pp. 1-21.

id. (b) "Unsimple Talk Manners: a note on Plato's Socratic use of the correlative adverb ὡς with opinion verbs" (『東京大学西洋古典学研究室紀要』5 (2009) 投稿).

(城西国際大学)